

が、後には賊をなせる僧、大抵にまれば、衆僧一統に禪師に申して、賊僧を追放せんとねがひけるに、禪師聞き届けて、其まゝに捨て置れしかば、數日の後、衆僧又此事を禪師に訴ふ、禪師猶その儘にさしおかれし、かくのごときの事、三四度に及びて、猶そのまゝに成りければ、衆僧大に腹を立て、もし賊僧を追ひ拂ふ事ならずんば、衆僧一人も残らず、退散すべしといひしに、禪師笑ひて、退散またくば勝手たるべし、悟道善行の僧は教ふるに及ばず、此結制も左やうなる惡心の者を教へるとさんためなれば、惡僧なればとて、みだりに追放すべからずといはれしにぞ、衆僧大に感服しぬ、かの賊僧もこれを傳へ聞きて、深く感悟し、座中に出で、賊をせし事どもをみつからざんげして、前非をあらため、德行堅固の僧となりきとぞ。

〔先哲叢談〕四伊藤維楨字原佐、號仁齋。○中略

嘗夜行郊外、劫賊四五人當路立、各按劔曰、吾徒不醉不樂、今無酒資、客若欠腰纏、則自脫衣裳供之、仁齋神色不少動曰、今日適無囊錢、敝緇袍脫以遺之耳、且問汝輩常以何爲業邪、曰昏夜橫行、掠奪以自給、是其業也、仁齋曰、以若所爲爲業、吾何拒焉、輒脫服以授之、將去、於是賊止、仁齋曰、吾儕草竊爲衣食數年、未嘗見舉止如客者、抑客何爲者、曰儒者也、曰儒者爲何事、曰以人道教人者也、所謂人道者、孝於親、弟於弟、不可一日無者、是也、人而無道、禽獸焉耳、言未畢、賊皆頓首涕泣曰、噫、君與吾鈞是人也、而事業之迥異如是、吾甚恥、願君宥吾儕罪、今而後飲灰洗胃、謹奉教于門下、遂皆改心自勵云。

陰德

〔伊呂波字類抄伊呂波字〕陰德

〔書言字考節用集八〕言辭陰德キントク、陽報ヤウハク、列女傳、有陰德者、陽報之、又見淮南子、五雜俎

〔日本書紀十九〕天皇明幼時夢有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寐驚遣使普求得、自

山背國紀伊郡深草里、姓字果如所夢、於是所喜遍身、歎未曾夢、乃告之曰、汝有何事、答云、無也、但臣向